

キャリア支援プログラム「佐世保高専機械工学科 シードプラン」の立案・実施*

森下浩二**, 森田英俊***, 小野文慈***, 下司睦子****

The Seed Plan; A trial of launching a career supporting plan in mechanical engineering department at Sasebo National College of Technology

Koji MORISHITA, Hidetoshi MORITA, Bunji ONO, Chikako SHIMOJI

Abstract

The group of homeroom teachers of mechanical engineering department at Sasebo National College of Technology launch a career plan, which students themselves make a plan, do preparation, and finally carry it out.

It is often observed that once student enter school, they seem to lose their idea of why they decided to be engineers and spend their school days without any plan for the future. In order to solve this problem, the authors have decided to offer students the chance to see the real world by inviting their seniors to school and sharing their times and experiences together. The first priority of this trial is that students themselves are supposed to work hard to make it happen. Planning this attempt, the authors named this project "Seed Plan", expecting this trial to create some opportunities for students to think about their future career as engineers.

In this paper, how this project is prepared and executed is reported. And in the end, what students have learned through this activity is presented.

1. はじめに

高専生は4年生になるとインターンシップが計画され、実際の社会現場を体験することができる。もちろん、5年生になると高専を卒業した後の進路について就職か、進学かの最終的な選択に基づいた活動に取り組むことになる。しかし、3年生以下の過

程においては、現在、特に将来を意識した取り組みはほとんどない状況と思われる。

平成13年に実施された佐世保高専学生アンケートによると、もともと学科の専門に興味を持って入学する学生数は年々減少傾向を示している。また、入学の際、何らかのエンジニアになる希望をもち入学してきた学生も、入学当初の緊張感が取れた第1学年後半から3年生くらいまでは、眼前の勉強と将来の職業で必要とされる知識・技能に関連性を見出すことができず、学習に対する取り組みに中たるみを体験している。

* 原稿受付 平成18年10月16日

** 佐世保工業高等専門学校 一般科目

*** 佐世保工業高等専門学校 機械工学科

**** 元佐世保工業高等専門学校 一般科目

これらの現象を引き起こす原因として、次のようなことが挙げられる。①基礎科目との関連で、低学年次に専門科目を多く設置できないため、将来自分の仕事に必要なと感じる学問を入学後すぐに学ぶことができない。②①に関連して、低学年では専門知識や工学実験体験が無いため、自分の知識と実現象との関連や興味が見出しにくい。③大学受験等ははっきりした目標が無いため学習に対するモチベーションの維持が難しい。(特に、入学当初から将来への目標を持っていない学生においては、この問題は大きいと思われる。)

佐世保高専機械工学科の1～3年までの担任であった筆者らでこれらの問題について話し合い、この中だるみを解消する一環として、学生が自ら本校OB/OGを招き、自分の将来の職業像を構築するため、また専門知識との関連性・実際の職業現場を知るための講演会を開催する計画を立てた。筆者らが勤務する佐世保工業高等専門学校においては、これまでも学生の将来を見据えた学習への取り組みを推進するため、学校側で企画した講演会は開かれていたが、それは4学科(機械・電気電子・電子制御・物質)すべての学生を対象とした一般的な話題に関する講演内容が主であったように思われる。そのため、学生の興味と講演内容が必ずしも一致していない可能性があった。

そこで今回は、特にひとつの学科(機械工学科)に所属する学生を対象とすることで、学生の興味に沿った分野の講演内容を設定できるよう計画した。さらに、本校OB/OGに講演していただくことで、学生らが具体的に自分達の学ぶ学問との関連性や、より深い専門的内容を知ることができる講演を計画することにした。また、学生自らが企画・運営する方式を採用することで、学生自身が単なる聴衆としてではなく、当事者として積極的に講演会に参加できるシステムの確立を目指した。

平成17年度は、本計画第1弾として、自動車業界に就職したOBに来校していただき、講演会を開催した。同様の講演会を継続して開催することにより、学生が現在学校で学習・訓練していることが、将来職場でどのようなかたちで活かされるのか理解する機会を学生に示すきっかけとなり、相乗的に学生生活の質が向上していくことを期待した。

佐世保高専機械科シードプランの最終的な目標は「学生自らが講演会主催に向け活動する中で技術者としての資質・関心を学生自らに主体的に探求させることにより、グローバル化した社会環境において、行動・思考する技術者育成への一助とすること」である。

本稿では、佐世保高専機械工学科1～3年の学生が、自ら本校OBを招いて講演会を開催したプロジェクトを紹介し、講演会後に回収した学生アンケートをもとに、今回の取り組みを振り返り、同様な試みの今後の可能性を考察する。

2. 教員側事前準備

機械工学科1年担任より、「早い時期から学生に対して、将来のイメージを形成する手助けとなる具体的な働きかけを始めたい」という意見が出され、それに2年・3年の担任が呼応する形で本計画立案がスタートした。

今回の取り組みが、機械工学科1～3学年学生の充実した学生生活への意識付け、さらには将来への「希望の種まき」となることを期待する思いを込めて、1～3年の担任団は本取り組みを「機械科シード(種まき)プラン」と名づけた。これまでも学校側によって企画・実施された講演会はあったが、本取り組みを計画する際、どうすれば学生が主体的に講演に参加できるシステムを作ることができるかを考えた。学生主体の活動を考えた際、まずは教員側が学生に示せる具体的なビジョンを持っておく必要がある(福岡県立城南高校2002)。そのため、学生にシードプランの実施を提案する前に機械工学科1～3年生の担任団で詳細な計画を立てるべく、準備会議を重ねた。その会議の中で決定した柱は次の3点である。

- * 学生自らが講演会の企画段階から参加し、実際の運営も担当する。
- * 講師は本校OB/OGに依頼する。
- * 単に講演当日で講演活動が終了するのではなく、その前後にも継続した活動を計画する。

キャリア支援プログラム「佐世保高専機械工学科シードプラン」の立案・実施

学生が中心となる活動を実施することにより、学生に積極的に講演会の立案・計画に参加する機会を設けることを考えた。その際、各自の仕事分担がわかりやすいように、作業内容を具体的に示した3つのグループを編成することにした。「データ班」「プレゼン班」「交渉班」である。各グループは機動性を考慮し、各学年2名の6名グループとし、3年生より班のまとめ役のリーダーを1名選出することにした。それぞれの班を1～3年生までの縦割りにしたのは、上級生が下級生を指導するチューター制度の効果も同時に狙ったからである。

中心的役割を果たすコーディネーターを編成する一方で、3つの班に入らなかった学生も講演会に能動的に参加できるように、各班のクラス代表がそれぞれのタイミングでどのような活動をしているかについて、途中経過をクラスに連絡する機会を計画した。その連絡用にコーディネーターとなった学生が使う進行記録表（資料①）を作成した。またコーディネーターでない一般学生用には、報告を単に聞き流してしまうのを防ぐ対策として連絡記録表（資料②）を作成し、報告を記録するように指示した。

次に、講師の話される内容が学生にとって現実性を持つものになるように、今回の講演は学生と同じ学び舎で高専時代をすごされた本校OB/OGを講師として招聘することを決めた。実際に学生時代を佐世保高専で過ごされた先輩の体験談は、在校生が自分の将来の姿をその話に投影することを可能にするものと期待した。本校は国立高専の第一期校として設立された歴史を有し、多くの卒業生を輩出している点も本計画の実現を後押ししてくれると考えた。

最後に、今回の取り組みが、単に講演会を聞いて完結するという事態はなんとしても避けたいと考えた。そこで、実際の講演日を中心にして、その前にも講演内容について学生に示す機会を計画し、各自が問題意識を持って講演に臨み、そして講演を聴いた後は、それを土台として次の新たな課題を見出せる機会を計画し、講演内容が今後の学生の活動につながっていくことを計画した。本取り組みがこのよう一連の流れをもった取り組みとなることにより、高専での学生生活が継続的に改善されることを期待した。

当初は、全ての学生がコーディネーターを経験することが望ましいと考え、6ないし7個のプロジェクトを同時進行で進める計画を立てていた。ただし、本格的なスタートが平成17年度夏休み後となったこと、本取り組みの初めての試みということで規模を見直し、平成17年度は2つのプロジェクトの実行に集中することになった。その際に計画した具体的な日程表は表①の通りである。企画当初は全員が複数のプロジェクトにコーディネーターとして参加することを考えていたので、カリキュラムの中で水曜7時限「特別活動」(LHR)の時間を主として利用することを考えていた。しかし、結局は、2つに限定したプロジェクトを、準備時間の少なさから平成17年度の実施は第1回シードプランのみの実施に変更したため、LHRの時間をその準備に使うことができなくなった。そこで、今回運営を担当する各班の学生は、基本的に放課後を利用して準備活動に取り組むことになった。

3. シードプランスタート

学生中心に構成、運営をするために、まず学生全員に対してのオリエンテーションを教員側で行うことにした。LHRの時間を利用し、1～3年生の各教室にて担任より、シードプランの目的・手順・作業の流れの説明をした。その後、第1回シードプランの講演内容・講師に関して学生の要望を確かめるためアンケートを実施した。

そのアンケート結果から、多くの学生が自動車関連業界に関する講演を希望していることがわかった。そこで、シードプラン第1弾として、自動車業界に就職したOB/OGを招いての講演会を計画することにした。その後、別の機会に、第1回シードプランの講演内容が自動車関係になったことを学生に報告し、コーディネーターとなって最初の講演会を企画・運営する学生を募集した。希望学生の中から、各学年担任により特に自動車関連の内容に興味を示した学生を6名選出し、それら学生の希望により3班に分けた。基本的には学生が主体となって準備・運営する活動であるが、教員1名がそれぞれのグループにスーパーバイザーとして参加することにした。

表1

【時間】	【作業内容】											
LHR	希望講演内容アンケート											
LHR	1M			2M				3M				
18月8日	クラス別に本プログラムの進捗について説明 「18年後の私」作文											
LHR	全体オリエンテーション 興味のある実験班にグループ分け、本プログラムの流れを説明											
	(前後はグループごと=活動)											
	Aグループ(前編班)					Bグループ(後編)						
	データ作成班		プレゼン、記録班		交渉班			データ作成班		プレゼン、記録班		
19week	質問事項 アンケート (1名)	関連知識 調査	関連知識 調査	講師のリ ストアップ	講師の決 定	マナー などの チェック						
SHR	講演者決定(10名)の報告、質問事項等のアンケート					アンケート記入						
1e	質問、疑 問集計		講師の確 認				質問事項 アンケート 上作り	関連知識 調査	関連知識 調査	講師のリ ストアップ	講師の決 定	
SHR	経過報告					講演者決定(10名)の報告、質問事項等のアンケート						
1e	講演スケ ジュール 作成	事前プレ ゼン準備		講師への 依頼文等	ホテル、 交通機関 の用意		質問、疑 問集計	話題の確 認				
LHR	事前プレゼン					経過報告						
1e	講演スケ ジュール 等を他の 班と確認	評価用 紙、感想 用紙、記 録用紙等 の準備	講師の確 認書等の 確認		町会、運 賃の準備		講演スケ ジュール 作成	事前プレ ゼン準備		講師への 依頼文等	ホテル、 交通機関 の用意	
LHR?	講演会(10分)											
	会場案内班		事後プレゼン班			会場案内班			会場案内班			
その週の 全曜日 翌日まで	感想文の 提出											
1e	感想文の 整理		事後プレ ゼン作成		礼状の作 成							
LHR	事前プレゼン											
1e							講演スケ ジュール 等事後の 振り返り	評価用 紙、感想 用紙、記 録用紙等 の準備	講師の確 認書等の 確認	町会、運 賃の準備		
LHR?	講演会(10分)											
	会場案内班		事後プレゼン班			会場案内班			会場案内班			
LHR	感想文の 提出											
1e	感想文の 整理		事後プレ ゼン作成		礼状の作 成							
LHR	振り返り発表											

4. 各班の作業内容

主として講演会を企画・運営する3つのグループの作業内容はそれぞれ以下の通りである。

データ班：学生の講演者・講演内容に関する詳細な要望を確認するためのアンケートの作成を担当する。その後、アンケートを集計し、アンケート結果を交渉班に伝える。また、講演会後に再度アンケートを実施し、講演会に関する感想をまとめる。

プレゼン班：講演内容に関するプレゼンテーションを担当した。プレゼンテーションには大きく分けて事前プレゼンと事後プレゼンがある。事前プレゼンでは、講演者の講演内容に沿って、予習となる内容の研究を行い、パワーポイントを用いてその発表をする。また、事後プレゼンでは、講演内容を復習するとともに、さらなる興味を学生に喚起するための研究に取り組み、講演会後のアンケートも含めて報告する。

交渉班：データ班から渡されたアンケート結果に

キャリア支援プログラム「佐世保高専機械工学科シードプラン」の立案・実施

に基づき、講演者候補ならびに講演内容を選定する。選定後は講演者候補と連絡を取り、最終的に一名の講演者を決定する。講演までには適宜講演者と連絡をとり、学生アンケートにおいて学生から要望のあった講演内容や講演日時、さらには本校への移動方法等の打ち合わせを行い、講演当日は司会進行を担当する。また、講演後には事後プレゼンの内容を講師に報告する資料と共に、礼状を作成し郵送する。

5. 具体的な作業内容

当初計画したそれぞれの班の役割は上に述べたとおりであるが、活動に取り組む過程でその時々の実態に沿うように変更した箇所があった。次に3つの班が実際に行った今回の取り組みをまとめる。

データ班：今回の取り組みを始めるに際しての基礎データづくりとして、教員側で学生の興味をのぞきたいの傾向をつかむためにアンケートをまず実施しておいた。そこで、データ班の最初の作業は、教員が作成したアンケート結果を元に、講師に依頼する具体的な講演内容を決定するため、第2弾のアンケートを作成・実施することであった。最初に教員側で実施したアンケートでは、各学生が自分の興味あることを記述式に回答した。第2弾アンケートではそれをポイントごとに箇条書きのかたち（25の内容からなる選択肢）にして、その項目の中から特に各学生が興味あるトピックを5つ選択する形式とした。それに加えて、項目に含まれていない内容で興味あることは自由に記述できるスペースを設けたアンケート形式とした。このアンケート結果得られた学生の要望は、交渉班を通じて講師に伝えられ、講演内容を決定する材料として利用していただいた。

また、講演を聴いての感想を尋ねるアンケートを実施し、その結果をまとめ、事後プレゼンのデータとしてプレゼン班に引き継いだ。

交渉班：本来であれば、データ班より引き継いだ学生の要望をもとに、本校OB/OGの中から講師を見つけることから作業は始まるが、今回は最初の試みであること、またスケジュール的に時間の制限があることを考慮し、事前に機械工学科長にご尽力いただき講師候補者を一人にしぼり、すでに内諾を

得ていた。

しかし、学生にはその交渉段階を疑似体験して欲しいと考え、今回の交渉班の仕事始めは実際に講師に依頼活動をするための対話練習・依頼文作成の段階から始まった。この際、通常の業務で同様の作業に慣れておられる事務部の職員にもアドバイス・指導をお願いした。また、当初は会話練習も行い、電話による打ち合わせを計画していたが、講師の方も企業の第一線で研究開発に従事していらっしゃる関係で、連絡の取れる時間帯も定まらず、実際には電子メールを用いた連絡が主たる方法となった。

今回、ある意味一番仕事が難しかったのは交渉班であったと思われる。それは、講師の方が現在企業で活躍していらっしゃる現役の研究従事者であり、ご本人の思いとは異なり、仕事のスケジュールの中から講演のための時間を見つけていただくのに想像していた以上に制限があったからである。計画作成時には、表①にもあるように正規のカリキュラムに組み込まれているLHRを利用することを計画していた。しかし、何回もの打ち合わせの結果、その時間に来ていただくことは不可能であることがわかった。また、別の日に講演を計画することにしたが、どうしても正規の授業時間帯に講演を設定することがかなわず、最終的には放課後にあたる時間での講演会となった。

プレゼン班：プレゼン活動で利用するパワーポイントの作成法・利用法の練習から、その活動は始まった。

プレゼン活動には既に述べたように、事前プレゼンと事後プレゼンの2つがある。これは、単に講演を聞いておしまい、というこれまでの講演会のパターンではなく、講演会前後に継続性のある活動を計画したからである。すなわち、事前プレゼンの目的は、講演を聴くための準備であり、事後プレゼンの目的は、講演内容の再確認、そして学生の中に更なる興味の喚起を引き起こすものである。

今回、事前プレゼンの内容として講師から提案されたトピックは次の3点であった。

- * 講師が勤務する自動車企業の歴史
- * 日本の自動車会社のそれぞれの特徴

* 自動車のエンジンの基本的な構造とその動き

プレゼン班はこれらの内容について、プレゼンするための基本データをリサーチした。図書館で本を調べたり、インターネットを用いたりして情報収集を行った。

当初の計画では、講演会後の事後プレゼンの趣旨は、講演内容を再確認し、それを土台として次の興味へと学生の意識をつなぐ働き持つものであったが、今回はその段階までプレゼン内容を進展することは実現できなかった。また、講演後の学生アンケート用紙として、コーディネーターの学生用、また一般の学生用別々の自己評価表（資料③④）を作成していたが、学年末の時間で学生自身がその分析をするには時間的制約があり、最終的には学生の感想を尋ねる簡略化したアンケートのみを実施した。そのため、事後プレゼンでは、アンケートに基づいた学生の感想、ならびに各コーディネーターの感想を報告するにとどまった。

6. 講演当日

本来であれば、正規の時間割の中で、水曜日7時限目に設定してあるLHRの時間を用いて第1回シードプラン講演会を開けるように、交渉班は講師と打ち合わせを続けてきたが、講師のスケジュールとの関係でそれはかなわなかった。実際には、金曜日の放課後の時間帯である8・9時限（午後4:10～5:50）での開催となった。ただし、講師のOBにおかれては、当日早朝関東地方を出発して、本校到着後、休む間もなく、パワーポイントの準備、そして講演会と分刻みのスケジュールとなった。

講演会は、当初の計画通り交渉班の学生の司会進行で進められた。講演内容は、講師が現在勤務されている会社での仕事の様子、勤務形態、そして現在の自動車開発の最前線において何が起きているか、またそれに加えて、講師が本校学生であった時の学生生活の様子、その時学習したことが現在の仕事にいかにかかされているか、本校OBとして後輩学生へのエール等、幅広い内容であった。これらは、学生に実施したアンケート結果から、講師が内容をまとめたもので、講師からは、学生の要望が事前にわかっていたので、講演内容を組み立てやすかった、と

いう感想をいただいた。60分の講演の後30分の質疑応答があったが、予定時間をオーバーするくらい、熱の入った内容となった。具体的な質問としては、「実際の企業における高専卒業生に対して期待されていること」、「勤務形態」、「在学中にしておくべきこと」、「企業が求める人材」、「仕事において一番楽しいと思うことは何か」等についての質問があった。

講演会の時間開始の遅さから、講演を聞く学生の姿勢に一抹の不安を感じていたが、それは全くの杞憂に終わった。講演に際して、学生の希望をアンケートで把握したことや、事前プレゼンで学習したことが、その講演内容に学生の興味を喚起するのに成功した結果と推測できる。

コーディネーターとして本講演会を準備・運営した学生は、講師の御好意により講師を囲んでの茶話会を、講演会後開かせていただいた。この際にも、くつろいだ雰囲気の中、時間の制約のため講演で聞くことのできなかった質問や、講演についての感想のやり取り等、とても活発に質問・意見が出たミーティングとなった。

7. 第1回シードプランを終えて

今回は、学年末試験準備期間に入る直前の講演会の開催となってしまい、アンケートの集計の時間、事後プレゼンとしてその詳細な報告をすることが難しくなってしまった。そのため、先に述べたように学生の感想のみを尋ねる簡略化したアンケートを実施するにとどまってしまった。平成17年9月にシードプランを実施することを決め、実際に第1回目の講演会を終えたのは翌年1月末であった。途中、学生には様々の学校行事があり、また講師のOBは多忙な業務があり、思った以上にその実現に労力と時間がかかった。第1回シードプランを終えた時点で、学生に今回の取り組みに関する感想文を書いてもらった。次に学年ごとに代表的な感想を記す。

第1学年：

- * 事前プレゼンがあったので、当日の講師のエンジンについての説明がわかりやすかった。
- * 講演後の質疑応答にもっと時間が取ればよかった。
- * 何のために高専に来ることにしたか、今一度再

キャリア支援プログラム「佐世保高専機械工学科シードプラン」の立案・実施

確認することができた。

- * 同じ学び舎を出られた先輩の経験を聞いて、自分も頑張ろうと思った。
- * 今しっかりとがんばることが、将来の自分につながるということがわかった。

第2学年：

- * 講演の開始時間が遅かった〔放課後の7・8時限目に当たる時間帯に講演会は行われた〕ため講演後の質疑応答の時間が短くなったのが残念であった。
- * 実際の開発現場の様子を聞いて、とても興味が持てた。
- * 講演の途中で休憩があれば、より集中して講演に参加できたと思った。
- * 初めての取り組みの中で、コーディネーターの学生が講演会をきちんと運営・実施したのは同じ学生として素晴らしいと思う。
- * 将来の自動車のあり方について、現在開発現場で活躍している技術者の意見は説得力があった。
- * 企業において、高専卒業生が活躍している事がわかって、同じ高専生として大きな自信となった。

第3学年：

- * 自動車のメカニカルな部分に関する話の割合が少なく残念だった。講演時間が短いように感じた。
- * 高専卒業後の進路を決める上、すごく参考になった。
- * 高専で学んでいることが実際にどのように現場で活かされるかよくわかった。
- * 自動車開発について具体的な仕事内容が聞いて、エンジンの構造にさらに興味を持てた。
- * 今回の講師は、高専卒業後、大学へ進学され、企業に勤務していらっしゃる先輩であったので、次は高専卒業後、すぐに就職された先輩の体験を聞きたい。
- * 高専で今学んでいる知識・技能が実社会で十分に立つことがわかり、自信になった。
- * 将来に対する漠然とした不安が、実際の現場の話聞いたことで、解決できそうに思えた。

今回のシードプランを計画する際、各学年により、機械分野における専門知識レベルの差により、講演内容の理解に大きな差がでることを危惧した時もあった。しかし、感想文を見る限り、それは杞憂に終わったようである。それは、事前プレゼンにより、学生間である一定レベルの共通理解が可能になったこと、また交渉班が本校のシラバスを講師に送り、講師の方で、3学年の知識差を考慮され、その説明方法を計画しておられたから、と思われる。

また、講演の時間が遅い時間帯であったにもかかわらず、今回の講演が多くの子に好評だったのは、担任団が予想していた以上の喜ばしい結果となった。

8. 各コーディネーター班の感想

今回コーディネーターとして、3つの班に所属し、講演会の企画・運営に中心的な役割を果たした学生の感想を、各班でまとめると以下のようなものであった。

データ班：

- * 仕事内容がはっきりしており、作業に取り組みやすかった。
- * アンケートを作成する際、学生の希望する傾向をいかに的確に把握するにはどのような内容にすればいいか、さらなる考慮の必要性がある。
- * 特定の分野に特化した講演が前提であるが、その分野において幅広い学生の要望を取り上げることができる内容のアンケート作成が難しかった。
- * アンケートに現れた少数の学生の意見をどのように活かすかも考える必要がある。

交渉班：

- * 当初電話を用いて講師と連絡を取ろうとしたが、その連絡時間の調整がとてもむずかしかった。
- * 講師となられたOBとの連絡にはとても気を使った。話し方・言葉使い等事前の練習は必ず行っておく必要がある。
- * 電話よりもEメールを使つての連絡が確実であった。

プレゼン班：

- * 事前プレゼンでは、パワーポイントの資料を作成したが、それを使つてのプレゼンを練習する時間がなく、事前プレゼンにおいて、思うような発表ができなかった。
- * 説明するのに一生懸命で、説明のスピードが速くなりすぎ、学生の理解を確かめながらの、発表ができなかった。
- * 説明内容を理解するための、配布プリントの利用方法を考える必要がある。
- * 講師により提案された内容について、インターネット等を用いて資料収集をしたのはよい経験になった。

総じて、単に講演会を聞くだけでは学ぶことができなかつたことを、自ら運営に参加した体験を通して学べたことが感想文から読み取れ、当初担任団が考えていた目的が、第1回目の取り組みからある程度は達せられたと思われる。

今回の講演会を運営するために3つの班を編成し、学生が中心となった講演会運営を計画・実施した。担当学生は、放課後に準備活動が集中し、クラブ活動との兼ね合いで苦慮する状況の中でも、それぞれの作業に責任を持って取り組んでくれた。

アンケートには直接表れていないが、学生の活動を観察している中で見えてきたこともある。そのひとつは、各班での学年を越えた連絡形態がうまく構築されなかつたために、3年生の負担が大きくなったことである。3年生が中心となり講演会の運営に取り組む様子には、頼もしさが感じられた。しかし、多くの学生がその運営に協力して取り組むというシードプランの理念を考えた際、1・2年生がさらに活躍する機会を今後いかに生み出すか考えていく必要がある。また、もうひとつは、運営・企画に取り組んだ3班で、横関係の連絡が十分に実現しなかつたことである。それぞれの班が、割り当てられた役割を適切に果たしていくと同時に、他の班の活動を支援することができれば、本試みで実施したシードプランが、ますます学生の主体的な参加を生み出すダイナミックな取り組みになっていく、と期待される。

今回の取り組みを全体的に振り返ると、いろいろな現実的問題から、事前の計画通り実行できない場合もあった。しかし、学生自身が講演会を企画・運営する、という基本理念は見失うことなく第1回目のシードプランを終えることができたと思う。

学生が中心となって運営する試みであったが、実際には裏方として学生の活動を補助する教師の仕事も少なくはなかつた。その中で、第1回目の試みに取り組むことで明らかになった改善点は、第2回目以降の取り組みをさらに有意義にするための課題として、今後対処していくべき問題である。

9. 最後に

日々の学生生活の中で、ともすれば将来のビジョンを見失いがちになる学生に対して、自分たちと同じ学び舎で学習し、巣立って行った先輩が語りかける言葉は現実感を伴い、在校生に予想していた以上に強いインパクトがあることがわかつた。学生は単に話を聞くというよりは、OB/OGの経験に投影して自らの将来を考える機会を持つことができた。また、講師も今回の講演のため多忙な時間を割いて、後輩のために講演準備・講演会への参加をしていただいた。これも同じ学び舎ですごすという絆があつてこそ実現したと思われる。

中学校時代に高専進学を考える学生は、一般の普通高校に進学する学生よりも、早く将来の進路を決定していることになる。その学生が、受験当初に持つ将来の自分のイメージに少しでも近づけるように、低学年から高専卒業時の自分のあるべき姿を考える機会を継続的に設ける工夫が必要となる。

現在シードプラン第2弾として、「造船」に関する講演会が計画されている。同様の取り組みを継続することにより、学生が日々の高専での学習・訓練にリアルな手応えを感じ、将来自ら行動・思考するエンジニアとして社会に貢献できるようになることが期待される。

参考文献：

- 1) 平成13年度佐世保工業高等専門学校学生アンケート (2001)
- 2) 福岡県立城南高校，“生徒主体の進路学習ドリカムプラン”，学事出版 (2002)

資料 プロジェクト Seed

自己評価表

()年 ()番 氏名()	
講演テーマ	グループ名(コーディネーター)

評価者:本人(コーディネーターとして活動した学生は関連する項目全て,参加のみの学生は裏の表のみ記入)

能力		観点	4	3	2	1
問題 発見	グローバルな 視野	話題について質問事項を考えることができた				
		関心のない話題でも積極的に関心を持つことができた				
		知らない知識・技術を知ることができた				
		自分の中で新しい話題・関心・意欲を持つことができた				
		講演を真摯な態度で聞くことができた				
思考力・ 問題解決	情報収集	様々な情報収集手段を利用し効率的に情報収集を行うことができた				
		目的に応じた情報を収集することができた				
		様々な情報収集手段について考え,活用することができた				
		収集した情報を他者と効率的に共有できた				
分析力・ 状況理解	情報分析	内容について事前調査・事後調査を効率よく進めることができた				
		自分の関心と話題との関連性を発見できた				
		自分の関心と他者の関心の相違点・共通点について理解できた				
		課題について理解を深めることができた				
		調査資料の分析・感想文・質問等の分析を効率よく進めることができた				
行動力・ 実行力	コミュニケーション	他のメンバー・参加者と協力できた				
		関係者からの指導を適切に受け,活かすことができた				
		事前・事後調査での仮説・予備知識のディスカッションを適切に進めることができた				
		担当講演者と適切に意思疎通し連携を図れた				
		外部との対応にマナーを守ることができた。				
	交渉	講演依頼相手を効率よく調査することができた				
		講演依頼相手に適切に趣旨説明をすることができた 交渉に必要な業務を適切にこなすことができた				
	会議運営	事前に質問・準備が効率よくできた				
		相手紹介・自己紹介が適切にできた				
		会議を滞りなく運営できた				
	プレゼンテーション	資料を適切に提示・準備できた				
関連ソフトをうまく活用できた						
参加者からの質疑応答が適切にできた						

